

本と社会

「人文ネットワーク」ニューズレター
2007年8月30日 第14号
[特別編集号4]

●発行元 人文ネットワーク
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部
●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-16-28
Tel.03-3202-7391 Fax.03-3202-5832
E-mail: yoshizumi@shinhyoron.co.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実、すなわち、単なる利便性や拙速性や広範性の中に腐心する本づくりの現状を批判し、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく——、定期的な読書会を通して一冊の人文書を読解します。それは、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解との連結です。当ネットワークは、本づくりのためにではなく、自らの本づくりのあり方を考え改革するために、まずは著訳者と編集者という当事者同士が出会う場として設定されました。私たちはこの作業を通して新たな現実的知性の発見を目指します。このニューズレターはこうした私たちの活動の一部をご紹介します。

特別
大座談会

小川徹太郎『越境と抵抗 海のフィールドワーク再考』を読む

稀有の人 現代民俗学者 小川徹太郎の仕事

2006年11月18日、本書の編者 佐藤健二氏(東大/社会学)、坂野徹氏(日大/科学史)、小林康正氏(京都文教大/民俗学)を囲み、第47回例会が早大大会館会議室で行われた。志半ばで逝った小川徹太郎の仕事の意味や、彼が格闘したテーマ「現場の知」「言葉の力」「現代民俗学の可能性」などが討議された。ゲストに金子毅氏、長野隆之氏、小林孝広氏を迎え、会場からは桑田、土屋、大野、白石、生江、片桐、李、入江、永田、出口が参加した。以下は各人の発言要旨である。(編集/出口)

● 現場の知、方法論、「海国」言説批判

佐藤 2003年7月の小川君の逝去後、我々は生前の彼の仕事を1冊の本にまとめる計画を立てました。試行錯誤の結果、論文として比較的同時にまとまっている4本(1、2、11、12章)を柱として編むことにしました。このうち、彼の研究の原点である広島県二窓の漁村を描いた「1 漁する老漁師たち」と「2 〈ハリキ〉について」は、彼のフィールドワークの構えそのものを象徴的に示している上、「現場の知」への視座がすでに表れています(第一部)。彼はそこから次に、民俗学の方法論の問題に自覚的に関心を広げていく。しかしこれに関するまとまった論考は遺されていないので、「4 フィールド再考」や「8 フィールドワークで用いた技術」等、方法論への視座が読み取れるものを配置しました(第二部)。そして、「11 近世瀬戸内の出職漁師」と「12 『浮鯛抄』物語」は、近代日本の「海国」「海民」「海人」言説批判の端緒を示すものです。これは今日の「総動員体制批判」にも繋がっていて、彼の仕事の今日的意義をも示し得ていると思います(第三部)。

李 私の出身地台湾では1990年代以降「海国」言説が拡張し、「南進政策」や「世界の中心」等のスローガンが「海洋立国」をめざす

台湾政府により提唱され、台湾の主体性の構築に利用されました。周辺化した台湾をこのように位置づけ直すことで、内在化した帝国主義への批判を欠いたまま、これを歓迎する人文科学の研究と一体化して文化生産が行われたのです。小川さんのお仕事にはこの「海国」言説を乗り越える視座を感じます。欧州は「EU」という共通言語を構築しましたが、「アジア」はまだ、この対位法と「越境」を手にしていないのが現実です。

佐藤 編者として振り返ると、本書では近代の「海国」言説を捉え直そうとしていた小川君の最後の仕事を十分に示せなかったのではという不安はあります。そこを補う意味もあって、「解説」では彼の「未完のプロジェクト」の学問的意義を私なりに述べました。小川君は何よりも、民衆に焦点をあてたいわば「調和モデル」としての「海民」思想が、民俗学がある時期に理念化した「常民」概念と同じく、社会的な対立や葛藤を否定・抹消し、統合を偽造してしまう点を批判していました。そしてこのように先取りされた調和ではなく、むしろ現存する違和にこだわり、「多様な社会的諸勢力の間の現実の対立や闘争を通じて、主権をめぐる転位が複雑に展開する場所として『瀬戸内海地域』を描く」ことをめざしたのです。この試みに形を与えるのは、難しい課題ですが、極めて現代的だと思います。現代の非常に薄っぺらな主体論や知識人論や文化生産論を深く批判する作業だからです。

生江 本書のタイトル『越境と抵抗』は、「小川徹太郎が夢みていた『現代民俗学』運動の核に据えうるシンボル」として与えられた(本書「解説」p.337)とあります。これは、彼のフィ

ールドワークの手法が、予め用意された質問表を片手に欲しい情報だけ収集する、一見効率的でシステムチックな手法の対極に位置することを示していると思います。いわば、人びとの日常という、生きることの全体性の傍らに彼自身の全体的な身体性を置き、そこに緩やかに生起する〈越境〉を道具とした、自己と対象の本質のまるごとへと迫る現象学的手法です。佐藤 小川君が現象学に学んだというより、民俗学そのものが、本質的には現象学的な相互性をもっていたのだと思います。越境と抵抗は、僕がひねり出したタイトルですけども、決して超越的で理想的な実践ではなく、むしろ民俗学に不可欠な対話の原点に置かれた身体感覚なのです。

小川徹太郎と『越境と抵抗』

● おがわ・てつたろう(1958-2003) 民俗学・文化人類学 ● フィールドと仕事 広島県呉市に生まれた小川は成城大学大学院時代から広島県二窓(ふたまた)浦に通い、瀬戸内の漁村と漁撈活動の研究を通して新たな民俗学の可能性を追求し続けた。80年代後半に佐藤、重信幸彦、大月隆寛の各氏らと「都市のフォークロアの会」を結成。90年代には、瀬戸内の漁民の出稼ぎ先であったフィリピンでのフィールドワークにも力を注いだ。2000年以降は「歴史表象研究会」を主宰、近代日本における「海」をめぐる言説を批判的に捉え直し、「海国、海民、海人言説の脱構築」としてまとめる仕事を進めていた。● 『越境と抵抗——海のフィールドワーク再考』はまだ記録されていない人々の経験の小さな声に耳を傾け、生活者の実践知を〈共有すべき知識の世界〉に解き放とうと歩く。本書は、この小川の志と探究の結晶を、小川の没後、歴史表象研究会のメンバー佐藤・坂野・小林・重信・吉田司雄が、遺された数多の論考・ノート類をもとに1冊の書物に編んだものである。

【新評論 384頁 2940円(税別)】

■書評: 森本孝(東京・中日)、田中優子(毎日)、佐藤智敬(中国)、吉見俊哉(論座)、米田綱啓(図書新聞); 以上掲載順





特別大座談会 「現場の知」を捉える

◆ 小川徹太郎の学問の姿勢

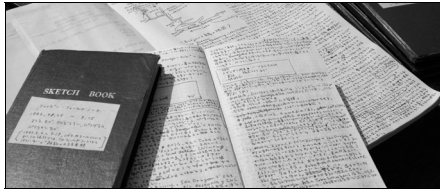
坂野 私自身は人類学史の研究をしており、小川さんとの学問的接点は「学とは何か」という問いでした。彼は、とにかくあらゆる経験や関心が民俗学につながっていく稀有な人でした。例えば彼の「企画メモ」ファイルには、「学界の権力」「研究費における南北問題」「師弟関係の病理的問題」「非常勤の民俗」…等の文字が見えます。ふつう、こうした問題は「愚痴」や「ゴシップ」に回収されがちです。だが小川さんの場合、それも民俗学のテーマになっていく。そこから、彼の仕事の広がりや「学」への問いも生まれていたのだと思います。

◆ 「書かれたもの」と「書くこと」の権力性

金子 本書のテーマは第一部が「フィールドワークを通じて(漁師の)経験知を記述する」、第二部が「この経験知の根源を探るための文献研究」という二点に絞られると思います。小川さんの仕事は、双方の領域をつなぐその手前で終わっている、そこが非常に惜まれます。もし完成していたら、現代民俗学に新たな息吹を吹き込むものとなったはず。同時にそれは私達自身の課題として重く遺されているわけですが、小川さんの生前の問題意識として、「現場」と「書かれたもの」との関係、殊にその論理的帰結についてどのような見通しを考えていたとの印象をお持ちですか？

佐藤 小川君は、現代のフィールドワークに対する問題意識を軸にして両者を実践的に繋げようとしていたと思います。民俗学における「事実」や「現場」とは何か。それは、1985年に我々が立ち上げた研究会「都市のフォークロアの会」に集った者に共通する問いでもありました。後に人類学において議論される『ライティング・カルチャー』の問題意識を、それぞれの研究の中で共有していたのです。その問いは、文献や書かれたものに対する疑いと繋がっていた。歴史学は文献に、民俗学は語られた言葉や行いに依拠する、とふつう理解されています。しかし、例えば柳田は「文献の限界」を指摘したのであって、文献を否定したわけではない。書かれたものは生活の一部分の記述

に過ぎず、それは常に権力性を帯びている、という認識が小川君にはあった。だから近世の文献資料を扱う場合も、それを作り上げた側の権力性まで射程に入れています。



びっぴりとメモが書き込まれた小川のフィールドノート

小林孝広 「書かれたもの」に対するこだわりは、「書くこと」に対するこだわりにも繋がる。小川さんは、いくら精緻なものであっても分析概念で対象となった人々を一面的に切り取るという姿勢の記述には容赦しなかったし、怒りはすさまじかった。「書く側」の研究者は、「書かれる側」の現地の人々が置かれる社会的な立場に責任があるという深い認識を持っていたのだと思います。それから本書には、小川さんの撮った写真がもっと収められていたらよかったです。現場で何にカメラを向けていたか、それは、フィールドワークの方法論や「書くこと」とも深く関わるはず。片桐 「6 終りのない仕事」や「7 タコの家主」などは、ほぼ小説といった趣がありますね。こうした書き方をする人のもの見方には、どこか作家の現地踏査に通じるまなざしというか、言葉にし得ないものに対する小説的な観察力を感じます。彼の書いた「物語」を読んでみたかったという気がしました。

桑田 一方で小川さんの文体は、筆が走り過ぎて小説的な面白さに終わってはいけなく、という社会科学者の矜持や禁欲も感じさせます。佐藤 彼には、目の光景を捉える「絵心」があった。言葉は後からついてきたのではないかと思います。「見たもの」をフィールドノートにスケッチしていく過程で、次第に文体や言葉の力を自覚的に使っていくようになったのではないのでしょうか。

桑田 一方で小川さんの文体は、筆が走り過ぎて小説的な面白さに終わってはいけなく、という社会科学者の矜持や禁欲も感じさせます。

佐藤 彼には、目の光景を捉える「絵心」があった。言葉は後からついてきたのではないかと思います。「見たもの」をフィールドノートにスケッチしていく過程で、次第に文体や言葉の力を自覚的に使っていくようになったのではないのでしょうか。

◆ 制度分析とマイクロロジー

土屋 第一部で経験知の問題、第二部で文献

の問題、そして第三部で学問の立脚点の問題と、本書は見事な構成を持っています。そして特に「第一部 シオとハリキ」では、経験知としての漁師の「熟練」がよく捉えられていて、「生きた共同性」に対する彼のまなざしは鋭いんですね。小川さん独自のフィールドワークと記述法が、細切れの「研究」では決して見えてこない、漁をする人々の経験の全体像や、「魚の経験を生きる」といった感覚を非常に的確に捉えていると思います。

桑田 たしかに本書は、漁民特有の時間感覚や身体感覚を独特の視点で捉えていて、読む側もそれらをリアルに掴むことができます。ただ、例えば清水光夫が『海洋国日本の幻想』で論じたような、借金漬けの漁民の過酷な現実や、「海は誰のものなのか」といった漁業の根柢を問うような分析は少なく、多少の物足りなさを感じるのですが。

佐藤 生前、小川君は海の世界を無縁、アジュールとして理念化したり、「農民」に対して「海民」をロマン化する形で対置しては駄目だ、と強調していました。これは網野善彦批判に通じます。「近代」は海をも支配する形で成立していったからです。ただし彼は、そのような海の近代、すなわち漁場の入会権の成立と解体を制度の側からではなく、漁民の側から語れないかと模索していた。彼がまず語ろうとしたのは、入会を支えていた人々の生活や感覚とは何であったか、という問題だったと思います。

小林康正 小川さんは、一時「マイクロロジー」ということも言っていました。それは、現場から制度を逆照射する方法です。制度論は歴史学がやっている、だから小川さんは民俗学の立場からそれを補完する方向を目指していたのではないかと思います。

◆ 「現場の知」を捉えるフィールドワーク

佐藤 『ライティング・カルチャー』以降、「フィールドワークは権力的だ」としてすり抜けた人もいた。だが、小川君はそうはしなかった。「書くこと」とフィールドワークをともに引き受けていこうとしていました。その分、非常にしんどい時期があったはず。批判のみに陥るナルシズムの助長、また客観性の全面否定や極端な構築主義だという反論や反感はまだ根強い。

中都市のフォークロアの会 民俗学の現状に強い危機感を抱いていた大月隆寛が世話人となり、1985年に作られた会。若手研究者が各々のフィールドで抱えていた問題を持ち寄り、民俗学の方法論をめぐって討議を重ねた。「競馬」の大月隆寛、「盛り場」の吉見俊哉、「柳田」の佐藤健二、「漁師」の小川徹太郎、「タクシードライバー」の重信幸彦らが参加。編著に、『幼女連続殺人事件を読む—全資料—宮崎勤はどう語られたか?』(JICC出版局 '89)。同様に、90年代初頭には、橋本裕之、小林康正らが民俗芸能研究の刷新を目指して、「第一民俗芸能学会」を立ち上げた(『P4 長野コラム』。編著に、『課題としての民俗芸能』(ひつじ書房 '93)。

中J.クリフォード&G.E. マーカス『文化を書く(原題:ライティング・カルチャー)』(紀伊國屋書店 '96) 文化を書く、というテキスト作成の実践行為を問題とし、「書くこと」の背後にある権威、制度、あるいは反抗、創造を明示した論集。「書く側」と「書かれる側」の力の不均衡、民族誌記述のレトリック等が分析された。「私は居た」という経験則を根拠に、民族誌作成と理論構築を行ってきた人類学は、その営為が客観的現実の解明ではなく、表象行為の一部であったことを指摘される。この『ライティング・カルチャー』ジョックは、人類学界に論争を巻き起こした。一部の強い支持を得た反面、それが民族誌作成やフィールドワークの放棄、あるいは内省や自己

批判のみに陥るナルシズムの助長、また客観性の全面否定や極端な構築主義だという反論や反感はまだ根強い。中清水光夫『海洋国日本の幻想』(新評論 '81) 副題に「海は誰のものか」と掲げた本書は、浪漫的幻想の対象として論じられがちだった「海」の問題を、漁業や海洋開発、環境汚染等、実際の利用状況から法や権利問題までを含め詳細に論じ、海をめぐる現実的論点を提示した。中網野善彦(1928~2004) 日本中世史を専門とする歴史家。日本史研究に民俗学的観点を多く取り入れた。中世の農民以外の非定住者である職人、芸能民、海民、悪党等の漂泊民の世界を明らかにし、天皇を頂点とする農民の均質的



「1 漁する老漁師たち」より

船だまりは漁浦の顔だ。(…)沖での漁を思い思いに描きながら、黙々と仕込みに打ち込む者たちを呑み込んだ、活気あふれるこの船だまりの雰囲気、私は好きだ。

小林康正 民俗学では「聞き書き」と言って、地元の人に質問して話を聞く、という方法が一般に取られてきました。でも、小川さんの場合、彼らの傍にただ「ずーっと居る」、「何か知らないけれど居る」、「居ても空気のように分からない」らしい(笑)。(現場)の知を捉える小川さん独特の方法が、そこに示されているように思えます。たとえば独自のフィールドワークの手法を創出した人物として宮本常一がいますが、小川さんは宮本とは調査地も重なっていたので、村人から彼の逸話も聞いていたようです。だが小川さんは、宮本に魅かれ学びつつも、宮本に対する批判も持っていた。

佐藤 そこには時代の問題もありました。宮本の時代(1930~70年代)の「歩く・見る・聞く」と、その後民俗学が普及し、各地で盛んに調査報告書が出版される時代とは、民俗学者が現場で何を見聞きし調べるのか、自ずと異なることを彼は自覚していたからです。

◆ 現代民俗学の可能性

入江 民俗学の「自己革新」は、なぜ1980年代後半だったのでしょうか？ 私の印象では、90年代、このあとの持続は“知的に下位文化を語る”言論へと合わさっていったように思えます。民俗文化をただ“オモシロく”相対化するそれは、小川さんのような方法論を含めた真摯な追求を隠してしまい、消去していった過程ともみえてしまうのですが。

佐藤 一つは、80年代という時代、大月隆寛が元気だったから(笑)。さらにさかのぼってすでに60年代には、宮田登、福田アジオら大月の上の世代による、伝統的民俗学を批判し(現代民俗学)を立ち上げようとする動きがありました。「学」として確立するため、入門書や調査ハンドブック等が作られ、日本各地で調査も進んだ。80年代前半にはそれらが一端落ち着きますが、実際にはそこに新たな「発見」は生まれておらず、むしろ「近代化の進展の中で民俗学は衰退してゆく」というどんよりとした認識が広がっていた。そういう状況の中で小川君や我々が関わった民俗学の自己革新運動が始まります。85年に「都市のフォークロアの会」が発足し、「方法論」の検討がむしろ重視されていきました。

土屋 伝統的民俗学が想定していた「閉じたコミュニティ」を見出せない、現代の情報化社会の中で、民俗学の「現場」をいかにして作るかを、小川さんも模索していたわけですね。佐藤 あらゆる情報が二次資料となる情報化時代であって、いかに「現場」を立ち上げる「一次性」を析出していか。民俗学の一つの可能性として、今後、現地の人々が採集し、蓄積したデータを共有していくようなプロジェクトが考えられると思います。また、「日本民俗学史」についても、柳田、折口、南方…といった人々を扱う英雄史観ではなく、地方各地の人々の採集・研究活動に支えられ成立した民俗学の歴史を構想する必要があります。

大野 民俗学の方法論への小川さんの反省的視点は明らかです。しかし、自己の学問のアイデンティティの危うさについては、まだ整理し切れていない印象もある。日本の学問の危うさは、一方で西欧由来の概念や道具立てを使って研究する自己を立ち上げながら、他方で西欧近代化を遂げつつある他者を研究対象としている点です。それゆえ、ある種の自己言及性の問題を孕む。この点について、小川さんは気づいていたはずですが、明示はしていません。これは、小川さん個人の問題なのか、それとも民俗学の問題でしょうか。

佐藤 まずは民俗学の限界と向いあう必要がある。民俗学は、現代思想の問いを真摯に受け止めてこなかった。しかし、日本/西欧という枠組で捉えるのではなく、学問にとって言葉こそがフィールドであり、現場である、という認識を我々は共有していました。現場で、彼が漁師から聞き取った「シオ」や「ハリキ」といった言葉は、まさしく生活の場で生まれた表現、新しい言葉であり、そこに民俗学は着目すべきである、という視点こそが重要でした。

白石 生活の中の「新語」とはある種の生産だ、という認識ですね。小川さんのそうした視座は、言わば「プロレタリア文学」のそれであり、「アンダークラスの生産性」を考えることだとも言えます。小川さんも言及しているサイドが『人文学と批評の使命』でアウエルバッハを取り上げつつ語っているように、言葉の厚みを丁寧にときほぐしていくことやアンダークラスの表現 = 生産を重んじることこそ、人文的価値観の再生に必要なことだし、小川さん

の仕事にもそれに通底するものを感じます。小林康正 「2」は、まさにその点への言及としても読めますね。小川さんはそこで、漁師のワザを「身体知」というような学者用語でくくらず、現地の人々がそれをどう言語化しているかを丹念に追い、さらにそれを研究者としてどう言語化していくか格闘しています。

書 評

深層から言葉を立ち上げる感性
小川徹太郎『越境と抵抗』に寄せて
評者 蔵持不三也
(早稲田大学教員/フランス民族学)

10年ほど前になる。かねてよりその学問に刮目していた小川徹太郎氏を明治大学の非常勤講師に推輓し、ややあってブリューゲル研究の権威である同大学の森洋子氏から、素晴らしい研究者を紹介してもらったと感謝されたことがある。その小川氏の早世を悼む仲間たちが素晴らしい遺稿集を編んでくれた。おかげで、氏の学問的航跡が一望できる。失った存在の大きさを悔やむと同時に、氏を取り巻く心のつながりに羨望の念すら抱ける。ありがたいことである。

一部でなおも《柳田ゆえの不幸》が優越している感のあるこの国の民俗学にあつて、小川氏は自らの民俗学の根幹を、透徹した、それでいてどこまでも優しい共感覚に据えている。生活誌に密着しながら、深層から言葉を立ち上げていく。そうした民俗学者としての感性は、たとえば《船だまりは漁浦の顔だ》(『漁する老漁師たち』)という、一見さりげない、だがフィールド世界すべてを一気に収斂させうる表現にも克明にみとれる。それだけではない。シオやハリキといった現地語を日常の文法から分析し、その背後にあるイメージを丹念に析出していくという非凡な手法すら、いつしか自家菜籠中のものとしてもいた。そしてそれは、学問的危機が叫ばれて久しい民俗学に、じつはなおも無限の可能性が秘められていることを過不足なく開示してもいるのだ。

この可能性とはまた、民俗学が真に引き受けるべき役割の謂いでもある。それを氏はこう指摘する。《「常民」、「海人」、「海民」などの形象化を通じて否定され、抹消され、曖昧化される研究も含めた語りや記憶、あるいは社会的対立や文化的闘争の過程に目をそらすことなく、新たな関係を結んでいこうとすることが重要である》(『海民モデルに対する一私見』)。ここには柳田民俗学に対する一種のアンチテーゼがみとれるが、明らかに氏はすぐれてポリフォニックな民俗のありようを透視していた。支配層が創り上げる歴史の操作性=陥穽をも見抜いていた。想い半ばでの夭折はまことに無念のかぎりだが、そんな氏が遺してくれた足跡は、日本民俗史のなかで赫々たる輝きを失うことは決してないだろう。

▶ 日本社会像に疑義を呈し、各領域に多大な影響を与える。百姓が農業以外にも多様な生業に従事していた点や、中世世界における「アジュール」(不可侵の聖域や平和領域)、「無縁所」(俗縁や世俗権力を積極的に断ち切った「自由空間」)の存在等を指摘した。主著に『日本中世の非農業民と天皇』(岩波書店'84)、『日本の歴史をよみなおす』(ちくま学芸文庫'05)等。
◆ 宮本常一(1907~81) 日本民俗学第一世代の柳田田男らに続く世代で、在野の研究者として大きな業績を残した

民俗学者。渋沢敬三に見込まれ、戦前から高度成長期まで日本各地を歩き続け(その距離は地球4周分に相当すると言われる)、庶民の膨大な生活記録を残した。百姓や庶民の側からものを見てゆく、という宮本の立場は、日本文化研究にアカデミズムの仕事とは異なる重要な視点を与えた。渋沢の設立したアチックミュージアムに所属し、それが後に日本常民文化研究所となる。主著に、『忘れられた日本人』(岩波文庫'60)、『瀬戸内海の研究』(未だ社'55)等がある。

KEYWORDS

現代民俗学運動の未来

解放され続ける困難

長野隆之 (國學院大学教員/民俗学)

今から10年以上前に、民俗芸能研究において画期となる運動があった。それは、従来の民俗芸能学会に対して、自分たちこそ「第一」であることを主張する「民俗芸能研究会/第一民俗芸能学会」に主導されていた。そこでは、民俗芸能を「始源・古風・伝統・素朴などのイデオロギー」から解放し、主題として、「現在」や「近代」といった民俗芸能を規定する外在的条件、ならびに「身体」という内在的条件を顕在化することが試みられていた。まさにこの分野での「越境」と「抵抗」を体現していた運動であった。その中心人物のひとりであった橋本裕之が、2006年5月に『民俗芸能という神話』(森話社)を刊行した。1989年から1996年に発表した論稿をまとめたもので、いまだに首肯する点が多々ある。このことは、10年以上前の「第一」や橋本の主張の先見性として捉えられもするが、その一方で、それらが十分に検証、もしくは展開されてこなかったことをも意味する。これはひとり橋本の問題ではなく、「第一」の運動からいまに至る時間を、我々は自らの問題として問い直さなければならないということなのである。「越境」し「抵抗」する存在であった「第一」を、後に続く我々はひとつのモデルとして捉えてしまっていたのではないのか。そのこと自体を問い直していかなければならないのである。

「ためらい」を武器として

小林孝広 (早稲田大学他教員/社会人類学)

小川さんの本を読むのはとてもしんどい経験だった。それは、文中の随所にあらわれる小川さんの「ためらい」に躓いてしまうからだ。そのたびに自身の調査や研究の姿勢に反省的に向き合わされる。ためらうことが非効率とされる今、この「ためらい」をこそ武器にしたのが小川さんだっと思う。そのとき小川さんは、この「ためらい」を研究者の良心として自閉させず、ものを書くことができる自分＝書く者の責任として社会の中にもう一度開いていった。だからこそ小川さんは、いま・ここで自分が何をしているかに自覚的であり続けた。

僕は今、フィリピン女性が日本で営むサリサリストア(フィリピンのどこにでもある道端の食料雑貨店)の研究をしている。“The Kogengaku Approach to the study of Sari-sari Stores in Victory Island, Eastern Samar” in Ushijima&Zayaz, *Binisaya nga Kinabuhì: Visayan life* (1996) という小川さんの論文が直接的な動機づけになっている。僕が通ういくつかのサリサリストアは、小口経済の特徴を引き継ぎつつも、日本人の夫たちに雇用の機会を提供する場にもなっている。小川さんは、「相模原のサリサリストア」という調査プランを持っていた。今同じフィールドに立ち、小川さんがいったいそこに何を、何を構想したのか、自分自身の「ためらい」を手を、小川さんとの対話を続けていきたい。

情と理の知をめざして

金子 毅 (東京基督教大学教員/文化人類学)

手に取った者を小川独自の世界へと誘わずにはおかない不思議な魅力、それは彼の死後、本を介して初めて邂逅した者をして「情念から見た社会文化論」の可能性に瞠目させる点にある。空間とそこに展開される人間模様を精査しようとした彼の知は、足元の現実の凝視から出発している。だが彼の議論には科学的理論化を急ぎすぎた局面と、調査者自身がフィールドに呑み込まれ欺かれる危うさの局面とが入り混じった、アンビバレントな不全感が残る。姜尚中がある雑誌で、学者には情と理のバランスが必要だ、といった趣旨の発言をしていた。私が目指すのもそんな境地だ。これは背反する二局面の揺らぎをいかに止揚するかという難しい問題だが、ノンフィクションの手法がそこに一つの糸口を与えてくれるように思う。たとえば佐野眞一著『私の体験的ノンフィクション術』(集英社、2001年)。時代性への鋭敏な感性から出発し、そこに醸成された主人公の情念世界への共感ないしは反撥を、理を尽くし構造的に描き切る。時に作家の放つ論理の力は、「理論」という硬直した常識に縛られた学者たちよりはるかに伶俐だ。また対象への情に突き動かされた筆の力は、「価値自由」というお題目に縛られた学者たちよりはるかに人間の本质を突く。情理の融合した研究。それは小川が私に遺した宿題である。

知識人と民主主義

白石嘉治 (上智大学他教員/文学)

なぜ教育基本法は改悪されたのだろうか？ なぜ「ヤンキー先生」は自民党から参院選に立候補するのだろうか？ 安倍首相は成城学園で大学まで「エスカレート式」にすごした。その首相が率いる政権は、ほんとうに一連の教育改革を進める権利があるのだろうか？

おそらくハーヴェイが『ネオリベラリズムとは何か』(本橋哲也訳、青土社、2007)でもいうように、こうした動きから透けてみえるのは「階級権力の再興」の「政治的プロジェクト」である。教育をつうじて階級の秩序が再構築されようとしている。問われているのは民主主義であり、さらには「新しい歴史教科書をつくる会」(96年)以来の帰結として、知識人の存立自体であることをあらためて喚起したい。

知識人がめざすのは、専門家や実務家の利害からこぼれ落ちる普遍性である。ヴィノックの浩瀚な『知識人の時代』(立花英裕訳、紀伊國屋書店、2007)も強調するように、最初の知識人ゾラはたんなる小説家だった。彼の抗議には現実的な根拠はなかった。にもかかわらず、海から飛び出す魚のように世界そのものにふれようとする。「つくる会」の標的が、こうした飛躍だったことを思い起こそう。いわく「政治には政治の道を歩かしめよ。学問はどこまでも学問の領分を守るべし」と。われわれは誰もが知識人として、いわば世間を踏み外し、世界を感得する必要がある。そのことなしに民主主義はありえないはずである。『越境と抵抗』に滞留している情熱が告げているのも、このことにほかならない。

民俗学ラディカルズの問い 編集後記にかえて

出口雅敏 (駒澤大学他教員/文化人類学)

80年代後半から90年代初頭にかけて、私が学生時代に魅かれた当時の民俗学には熱気と毒気があった。だが、「都市のフォークロアの会」や「第一民俗芸能学会」に集った彼ら“民俗学ラディカルズ”の問いは、その後、急速に忘れ去られた観がある。小川さんは、あの時期の光と影を背負って生きていたようだ。「文化を書く」、「フィールドワークをする」ことが半ば制度化された民俗学や人類学であって、小川さんは「なぜ書くのか?」「なぜフィールドワークをするのか?」という問いに真摯にこだわり続け、答えようとしてきた。そうした言わば根源的な問いは、“研究者青年期”特有の悩みや疑問、反抗として受け止められ、結局は、早く大人になれば、と論される。しかも近年は、学問の生き残り賭けて、ますます己の学問の社会的実用性のアピールに汲々とする時代となった。「役に立つ」こと、の時間軸が徐々に短く刈り取られ、フィールドワークも矮小化され、切り売りされる。おそらくここ数年、タイトルに「フィールドワーク」と掲げる入門書がやたら増えたことも、そうした風潮と無縁ではない。ただし、フィールドワークという手法が民俗学や人類学を越えて、広く人文社会諸科学において共有される状況は明るい。問題は、かつてのように、フィールドワークそれ自体について再考する契機も再び生まれ、共有されていくかどうかだ。